

東京の暮らし

写真が語る百年の暮らしの変化

中本 浩

12042013

## 40 町内防空演習

京都市で初めて空襲を受けたのは東山区馬町方<sup>うままち</sup>

面で、昭和二十（一九四五）年一月十六日二十三日でした。死者三十四人、負傷者五十六人、全半壊四十四戸。防火用水が凍っており、氷をたたき割って消火したのでした。それ以後、京都も何度となく空襲を受けたのです。

たとえば四月十六日には、B29一機が東から飛来して、右京区の太秦巽町<sup>うすまさ</sup>、梅津段町、北広町周辺に二百五十kg爆弾十発を投下。三菱重工業第十四製作所や民家などが被害を受けました。昼時で、工場労働者の多くが食堂へ行っており、爆弾

が落ちた民家の住人も外出中でしたから、死者は旋盤工員班長ら二人ですんですが、重軽傷は四十八人。当時、三菱重工へは第五中学校生（現在の桂中学校の場所にあった学校）、嵯峨野高等女学校生、京都高等女学校生が学徒動員されていたのですが、重軽傷を受けた中には、その人たちも含まれていました。しかし新聞は、この空襲に関しては「再び京都府下へ投弾」と軍の命令によって記しただけ。働いていた人も、爆撃されたことを口外することを禁止されていたので、一般の人々には実情が知らされていなかったのです。

六月二十六日には上京区出水<sup>でみず</sup>が空襲を受け、五十人が犠牲になりました。そこで「京都も戦場たるべし」という軍の考えに基づき、国民学校配属将校と在郷軍人会が中心となり、各町内で防空演

習を行ったのです。当時は写真を撮るだけでスパイ呼ばわりされた時代です。憲兵が立ち会うことで撮影許可が出たのですが、検閲が厳しく、憲兵にカメラごと提出。軍人・軍装が写っているものは不許可となり、町内の人だけが写

った写真のみが町内に返されたのでした。

そのようにして行った防空演習でしたが、実際に焼夷弾を落とされた他の地域では、この防空演習のような仕方では消火できず、人々は防空壕やさらに安全な場所を求めて命からがら逃げるだけでした。

▼写真Ⅱ昭和二十(一九四五)年/京都市中京区室町通六角下ル「藤村博氏所蔵」